

3—2. 移築復元工事

(1) 工事の概要

護国神社境内に移築されていた旧表御殿能舞台を解体し旧位置に復元するため、前章の調査を行い、元の姿を正確に把握することにつとめ、次の工事方針を固めた。

- (1) 床下の遺構面を山砂で埋め戻し、旧地盤より約60cm上部に新地盤を設定する。
- (2) 床下の漆喰叩きによる反響装置を旧にならって新設する。
- (3) 旧材中使用に耐え得るものは極力再用するものとし、一部は樹脂補強を施す。
- (4) 補足する新材は古色仕上を施す。
- (5) 橋掛りの鏡の間側の端部は原形より切り詰めた部分があるため、これを復旧する。
- (6) 屋根は棟瓦葺になっているが、これを柿葺の原形に戻し、銅板を以て柿葺状に仕上げる。
- (7) 裏通路を原形に復元し、古絵図に従って樂屋を復元新築する。
- (8) 板壁に描かれた松、竹の図の内、松の図は絵具の剥落が激しいので、別途補修を考える。

(2) 床下装置

発掘された舞台下の漆喰叩きによる箱状の施設は、他に例のない貴重な音響用装置と考えられるので、新たに設定した地盤面に同一手法で同形に新設した。この復元には奈良国立文化財研究所の指導を受けた。

規模： 舞台下、 5.95m×8.67m、深さ60cm～70cm

橋掛り下、2.12m×11.22m 深さ30cm～40cm

材料： 山砂0.5、砂利0.3、石灰0.2の比率で混合し、ニカリ液を4l/cm³の量で凝固剤とする。

施工方法： 上記材料を木槌で叩き固め、約12cmの厚さに築成するが、工程を4層4期とし十分な固結を計るものとし、適当な凝固期間をとり全工程を約4週間とした。(写真3)

(3) 基礎工事

柱下及び土台下には花崗岩の切石が用いられていたが、これを大部分再用し、裏通路の新規復元部分等の不足分は同種材で補足した。また布石、根石の下部全面に、厚さ20cmの鉄筋コンクリート布基礎を新設した。埋め戻した遺構に損壊をもたらさないよう、施工には細心の注意をはらった。

(4) 木工事

旧材の調査によって、これを、再使用、樹脂補修又は新材で補修の上再使用、廃棄、の三種に分け、極力、再使用を計った。しかし腐朽した部材が多い床組材や小屋材等は大部分再使用に耐えず、新材ととりかえた。舞台四隅の主柱4本の内、再使用したのは1本のみで、3本は新材とした。しかし頭貫から上の、組物、桁、化粧小屋裏、天井等の見え掛りの化粧部分は、大部分再使用が可能で、ほぼ旧状が維持された。

舞台と橋掛りの床板は全部を桧の新材に取り換えた。解体調査によても、創建時の床板の厚さと幅は特定できなかったので、文化財指定の諸舞台と、国立能楽堂その他の現代能舞台の実情を勘案し、板厚28mm、板幅30cmとした。根太への取付けは目錠を用い、床板同士の接合は竹の合釘(太さ約6mm、長さ約3cm)を約49cm間隔に打って振動伝達を計った。旧材調査では鉄製合釘を使用していたが、現在市販の類似品では錆と腐蝕に不安があり、竹釘を選んだ。

柱その他、見え掛りの新材使用部には、床板を除き、全面古色仕上を施した。古色仕上は顔料による顔料古色と焼古色の二種を部位に応じて使用した。

顔料古色は、松煙、ベンガラ、アンバー粉(色調各種)等の顔料を水溶きして木部に塗布し、適宜これを拭き

取り、乾燥後、柿渋を塗布して保護膜を作り、稻藁等を用いて表面を磨いて仕上げる。

焼古色は、希塩酸で表面処理をした上、トーチランプ等の焰でムラなく表面を焼き、ワイヤープラシ等で炭化部を除去し、その上に顔料古色を施すものである。舞台の見え掛り主要部はすべて焼古色仕上とした。

化粧垂木、隅木等の先端部は腐朽が目立っていたが、できる限り新材交換を控え、樹脂補修の上再使用した。樹脂はエポキシ系二剤混合型で成型し、アクリル系樹脂塗料で古色をつけた(写真4)。組物と垂木の木口は胡粉を用いて白く塗った。

(5) 屋根工事

屋根は柿葺の形状に復元することとした。但し仕上材は銅板の特殊段葺として柿葺に近似の形状とした。

軒付けはサワラ材で復元し、舞台軒先は10段、厚さ15cm、橋掛り軒先は7段、厚さ10cmに積層し整形した(写真5～7)。銅板は0.4mm厚、葺足75mmの一文字段葺きとした。

棟は、ノシ瓦9段(橋掛り棟は4段)積の上、ガンブリ瓦を上げ、鬼板は損傷の少いものは再使用した(写真8)。

(6) その他

道成寺演能等に使用される吊輪状金物、滑車は新しく調製した。橋掛りと鏡の間の境界部は、鏡の間が外観復元部に含まれるため、床板は連続延長したが、他は構造を分離し、防火シャッターで隔離した。

舞台と書院の間の空地は白砂利を敷きつめ白州を復元した。

附記

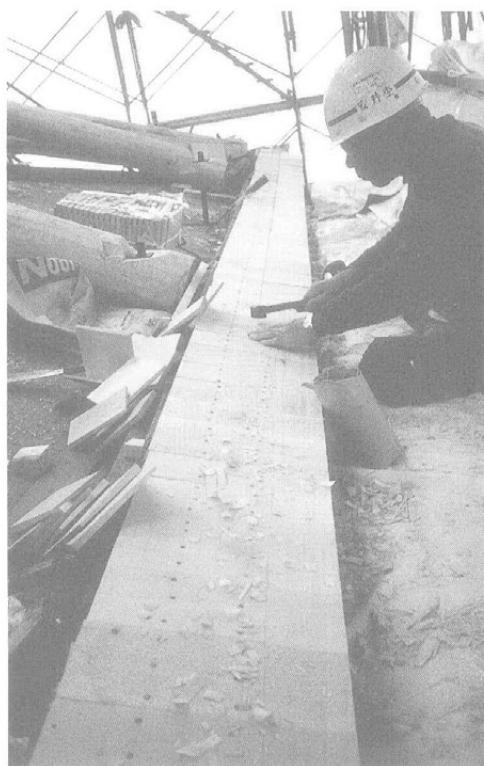
移築した舞台は、表御殿が博物館として使用される場合の歴史的文化的な中心施設として復活することが、全工事の重要なテーマとして位置づけられた。舞台に向い合う殿舎の、本来、観能の見所となる部分については、一応の外観復元と同時に、現代的観客席としての施設が設けられることになり、それとの相関関係を考慮する必要があった。観客席すなわち見所が、近世の畳の上に正座する姿勢から、現代の椅子席に変えることによって、視線の高さが違ってくることを考慮し、相対的な床面の高さを、舞台面で15cm高く設定して復元した。(図6)



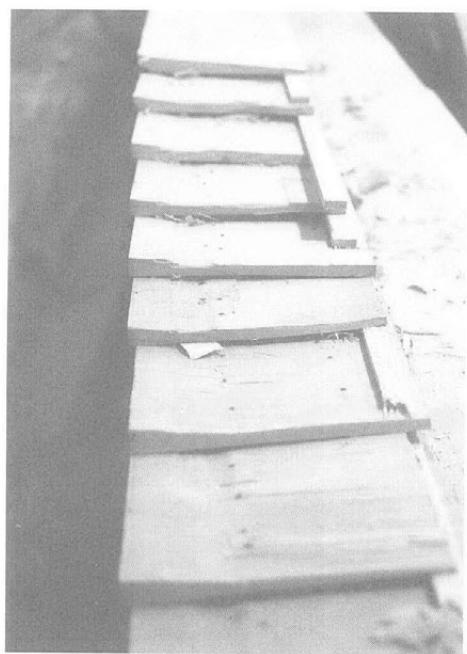
写3 能舞台床下漆喰叩き施工



写4 当初材腐朽部の樹脂加工による補修



写5 能舞台屋根・軒付け



写6 能舞台屋根・軒付け



写7 能舞台屋根・軒付け



写8 能舞台鬼瓦と銅板葺